

CASE 2

鹿児島→千葉

離島医療の経験を生かしながら
専門医の認定を取得する●千葉県立東金病院 内科医長
地域医療連携室・室長 古垣齊拡氏医療の方向性を決めた
プライマリケアとの出会い

2000年、当時医学部6年生だった古垣齊拡氏は、財団法人・医学教育振興財団の派遣により、英国ニューカッスル大学医学部で短期臨床留学を行う。そこでプライマリケアに出会い、臨床の現場での研修を志すようになった。卒業後は、鹿児島生協病院で初期研修を行い、その後4年間にわたり奄美大島で離島医療に従事した経験を持つ。

「地域医療では患者さんから学ぶことも多く、充実の医療を行うことができていることを実感しました。そのうえ、医師自身も成長できる場なので、今後とも携わっていきたいと考えていました。そこで、患者さんが多いにもかかわらず専門医が圧倒的に少ない糖尿病という分野に興味を抱きはじめました」

そんななか、博多の講演会に招かれていた、東金病院の平井愛山院長の「専門医認定を取得可能な取り組みを行いながら地域医療連携を行っていく」という話に感銘を受けた古垣氏。

これまで自身が離島で行ってきた4年間のプライマリケアでのキャリアを閉じたくなかったこと、糖尿病と内分泌の専門医取得という2つのキーワードを胸に、転職を考えるようになった。

2006年、東金病院に魅力的な研修プログラムを作ること注力していた平井院長は、古垣氏に会うために奄美大島まで出向いた。「一緒にやろう！」という平井院長の熱き思いに感動し、翌年、思い切って平井院長のいる千葉県立東金病院のドアをたたいた。

「今は充実しています。転職のときは、とくに転職先の上司との相性は重要ですね。私の場合は、実際に会って直接お話しして、お人柄を知る機会があり、考え方にも共感できたので、仕事もしやすい毎日です」



古垣 齊拡 (ふるがき・なりひろ)

1972年鹿児島県生まれ。2001年3月、鹿児島大学医学部・医学部卒業。4年間にわたり奄美大島で離島医療に従事した。2006年4月、奄美医療生活協同組合・常勤理事、南大島診療所・所長。2007年4月より現職。

赴任後、専門性を磨きつつ、離島で培った地域医療の経験を生かしながら、平井院長と一緒に総合医と家庭医を育てる取り組みを始めている。5年前は中堅クラスの医師が中心だったが、今ではレジデントと中堅とバランスよく配置できるようになってきたそう。そして今育てているレジデントは、5年後には主力となっていく。後輩の成長に寄り添えるのは大きなやりがいに通じると古垣氏は語る。

ライフプラン表に沿って
人生のストーリーを描く

転職には、家族の協力や理解も重大な要素。現在、6歳を筆頭に3人のお子さんがいる古垣氏。妻も子どもたちも、すんなりこちらの環境に順応してくれた。

実は、古垣氏の「キャリアデザイン」の軸になっているのは、エクセルで作っているオリジナルのライフプラン表。家族、キャリア、健康の3つを軸に、転職を意識し始めた頃から65歳まで、自分なりのライフプランを設計してあるのだ。そこには、人生それぞれのステージにおいて、自分は何をめざし、何を優先させるのかが、明確にかかっている。

「ビジネス書が好きで、いろいろ読んでいるうちに、面白そうなので自分でライフプランを作ってみました。そ



千葉県立東金病院

千葉県・九十九里沿岸部の山武・長生地域に位置する東金病院。

名称	千葉県立東金病院
所在地	千葉県東金市
診療科目	内科、小児科、外科、皮膚科、泌尿器科、眼科、人工透析
病床数	60床
職員数	80名弱



患者さんともできるだけコミュニケーションをとる。



CT画像とMRI画像を見ながら後期研修医とミーティング。

うすると、自分の10年後、20年後がしつかり見えてきました。確認の意味で、毎日、エクセルを開いて見るようにしています」

どんな職場環境であれ、実際に、現状に100%満足することは無理な話。時には迷ったり悩んだりするのが正直なところだ。転職早々、古垣氏にも、心が揺れた局面もなかったわけではなく、という。しかし、このライフプラン表を見直すことで「今、自分は、こういう目的のために、ここにいて、これを学び、この体験をするのだ」と気づくことが、大きな支えとなった。基本があれば、ブレることはない。

東金病院に赴任して3年目。日本内

分泌学会の内分秘専門医の試験は2010年に受ける予定だ。

「若い世代の医師は成長する過程にありますから、資格が取得できるというのは大きなポイントです。そういうことが、医師の動く(転職する)理由の一つだと思えます。都会か地方かではなく、病院の取り組み次第で医師は集まるはず」という。

将来的には故郷の鹿児島に帰る予定という古垣氏。「やはり、その土地で育った愛着のある人が、その土地の医療を守って行くべきだと思います」

今はまだライフプランの中間地点。この先も、作り上げた自分のストーリーを進進していくことだろう。